

## 活動報告書

報告者氏名： 阿部 直也 所属：大分県立新生支援学校 記録日：25年2月14日

### 【対象児（群）の情報】

- ・学年 小学部4年 2名
- ・障害名 知的障がいを伴う自閉症1名・知的障がい、ADHD
- ・障害と困難の内容
  - (A) 知的障がいを伴う自閉症児で、言語表出の面での困難さを抱えている。日常生活場面での教員の言葉がけは概ね理解できている。要求の場面では、クレーンハンドや手差しなどがあり、そのことにより家族や担任は本児の要求を大まかに理解できている。ipad を所持しており、保護者からも学習活動で利用して欲しいとのニーズがある。
  - (B) 表出言語があり、日常生活場面での会話もできる。しかし、注意の転導が激しく学習上の困難さにつながっている。そのことから、ひらがなも未習得である。ipad には興味を持っており、使用したがる様子が見られる。

### 【活動目的】

- ・当初のねらい (A) ipad を利用しての要求手段の拡大・福祉機関との連携した使用  
(B) ipad を利用しての学習活動の充実  
(A) (B) 校外での利用
- ・実施期間 1年間
- ・実施者 阿部直也
- ・実施者と対象児の関係 担任

### 【活動内容と対象児（群）の変化】

- ・対象児（群）の事前の状況
  - (A) ipad を所有していることもあり、操作面では問題はない。しかし、主な使用目的は保護者がダウンロードしたビデオ鑑賞やゲームなどであり、学習面での活用はみられなかった。
  - (B) ipad の使用は初めてである。指先の不器用さがありタップなどの操作から指導する必要があった。
- ・活動の具体的内容
  - (A) (B) 学習時の使用、校外学習時のしおりとしての使用
- ・対象児（群）の事後の変化
  - (A) 学習面では「ひらがなアプリ」「とけい」「なぞルート」などを使用した。ひらがなにおいては、自らアプリを選択して自主的に行う姿が見られた。この学習と平行して手作りのパズル教材などを行ったところ、今までの学習時以上に成果が見られた。また、なぞルートにおいても同様に自主的に学習に取り組む姿が見られ、この学習時以降の精度が増してきた。「とけい」については、当初は予定になかっ

たが、アプリを入れておいたところ、自ら操作して見つけ出し取り組みはじめた。視覚情報のみであったが、操作を通して「とけい」に関することがらを認識できたようでとても意欲的に取り組む姿が見られている。

- (B) 導入当初は、「なぞルート」を主に使用していたが、手先の不器用さから思うようになぞることができないことがあった。そのことから使用する学習場面を変更し、Drop talk を使った、食べ物カードのマッチングの学習の際に使用した。本児は食べ物カードが大好きであり、そのことと興味のある ipad を使用できるという相乗効果もあり、注意集中が格段にできるようになった。またあわせて操作面においても画面をタップするだけでよくなり、本児の現在の手指機能にあった使用をすることができたおかげで、自信をもって取り組む姿が見られている。

(校外での使用)

- (A) 校外学習時に携帯していたところ、バス車内で目的地につくまでの間、ダウンロードしていたビデオを見て過ごす姿が見られた。また、見学先では教員が ipad に入っている写真を提示したところ、スムーズに次の活動にうつることもできた。

- (B) ○自動販売機の利用の際に、ipad を携帯し取り組んだ。事前に key note で購入までの一連の流れを準備しておき、校内で事前学習を行った後にでかけた。購入場面では本児が困ったときに ipad で確認をすることで、購入することができるようになった。

○本児は注意の転導も激しく、行動面での課題もある。そのことから「ビデオ機能」を活用して、学校での約束場面を録画し、家庭でも確認できるようにした。そのことで、家庭との連携も深まり同じ内容で取り組むことができた。

#### 【報告者の気づきとエビデンス】

##### ・主観的気づき

- (A) 知的障がいを伴う自閉症児にとって、ipad などの機器は他者に左右されないこと、同一性の保持が担保できることから、取り組みやすく分かりやすいものであるようで、とても意欲的に取り組む様子が見られた。学習面では、自ら「ひらがな」「時計」などのアプリを使って学習する姿が見られ、ひらがなへの興味・関心の拡大がみられた。余暇場面での使用も見られ主にインストールしたビデオを繰り返し見たり、過去の写真を見たりしたりするなどの姿が見られた。当初は、コミュニケーション面での使用を考えていたが、保護者・担任・サービス担当者はある程度本児の要求を理解できることから、活発な活用には至らなかった。表出言語を持たない本児のような事例には有効な活用だと思いが、今後も研鑽を積んでいきたい。
- (B) 注意の転導が激しい B にとっても ipad は興味をもてる機器だったようで、ipad を用いた学習時にはとても集中して取り組む姿が見られた。手指の不器用さが見られる B にとっては、当初タップなどの操作の面で課題が見られたが、繰り返し

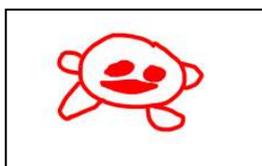
指導したことやアクセシビリティの面で工夫したことで改善した。Bは人への依存傾向も強いが、ipadを用いることである程度自立した学習が可能となりつつあるので、そういう面での活用も模索していきたい。

- ・エビデンス（具体的数値など）
- ・その他エピソード（画像などを含めて）

○対象児以外にも、ipadに興味を持つ児童は多い。しかし保有台数が限られている現状がある。そのことが功を奏したエピソードとして、子どもたちがipadを囲み教え合う場面が見られた。個人所有が望ましい面もあるが、こういった子どもたちの教え合う・伝え合うといった姿も学校現場では大事に育てていきたいところである。



○対象児ではないが、知的障がいを伴う自閉症のCは、学習後のご褒美としてipadを操作できる時間がある。その中で、自らいろいろなアプリを操作し、カメラ機能に気づき、友だちや風景・学校の様子を撮影していた。そして、アプリを使って画像を加工する技術にも自ら気づき楽しんでいる。ある講演会で「壊れてもいいから自ら操作することが大切」と聞いた。「教えなくてもできる！」という面で、子どもたちの興味関心の大切さに気づかされたエピソードであった。



○Bの事例では家庭にも持ち帰ってもらったが、ビデオ機能以外にも、本児が日頃使っている学習アプリについても説明をした。そのことで家族の全員が、本児の日頃の学習の様子がよく分かったとの報告を受けた。また、きょうだい児も楽しんで使用していたとの報告もあった。「家族支援」「きょうだい支援」といった側面にもつながるツールになる可能性を感じた。

